

N·G·F

業界ニュース

■古河電工 '85.11.29 日経産業 フッ化物ガラスファイバー

古河電気工業はフッ化物ガラスファイバーを80本並べた帯状のケーブルを開発し、二次元的な温度分布を測定するシステムを実用化する。

■富士フィルター、大工試 '86.1.21 日経産業 新型ポーラスガラス

富士フィルターは、大阪工業技術試験所と共同で、二酸化ジルコニウムを含むことを特徴とする新しいポーラスガラスを開発した。細孔の大きさを40Åから1.2 μ mまでコントロールすることが可能でアルカリなどの薬品に強い。

■大阪府立大南助教授 '86.1.22 日刊工業 超イオン伝導ガラス

大阪府立大学工学部の南努助教授らは、AgX—Ag₂O—GeO₂系の超イオン伝導ガラスにおいてXが従来のよう素の系に加えて、塩素、臭素の系についてもガラス化に成功した。イオン伝導度は、いずれもイオン伝導体として必要な1千分の1シーメンスをクリアしている。またこの試料をもとに伝導機構の解明を行った。

■旭ファイバーグラス '86.1.24 日刊工業 電磁波シールド用高導電性ガラス繊維

旭ファイバーグラスは、3月から高導電性ガラス繊維「エミテック」の本格販売を始める。同製品は直径13~23 μ mのガラス繊維の表面に0.3~1.2 μ mの厚さの金属をコーティングしたもので、金属繊維なみの導電性をもちFRPに使えるので電磁波シールド材に適している。

■石塚硝子 '86.1.28 日刊工業 磁気ヘッド用非磁性体スパーサー

石塚硝子は、ガラスセラミックス「デビトロン」を使用して磁気ヘッド用非磁性体スパーサーの厚さを従来の $\frac{1}{2}$ の50 μ mにすることに成功した。ガラスセラミックスの熱膨張係数をフェライトと同じにすることにより両者の剝離を防ぎ高密度記録の要求に応えた。

■HOYA '86.1.31 日経産業 光通信用スラブレズ

85年日経製品賞に、HOYAの開発した光通信用スラブレズが選ばれた。分子スタッフィング法でガラスに一定の屈折率分布をもたせたレンズで、入射光が線状になって出てくるため光ファイバーの分岐結合素子として活用できる。

■日本板硝子 '86.2.18 日経産業 太陽電池基板ガラス

日本板硝子は、幅600mmの大面积太陽電池基板ガラスの生産設備を4月にも完成させ操業を始める。建築分野向けとして当面米国を中心に用途開発を進める。

■都立大馬場教授 '86.3.5日本工業 二酸化イリジウムEC膜

東京都立大学工学部工業化学科の馬場教授は、メッキ技術を使った二酸化イリジウムの新製法を開発した。二酸化イリジウムは、エレクトロクロミック (EC) 材料として、従来の三酸化タングステンなどより応答測度がはるかに早いという脚光を浴びていた。これまで成膜が困難であったが、こ

N·G·F

業界ニュース

の製法では板ガラスに丈夫な膜をつけられる。

■HOYA '86.3.6化工日報 モリブデンシリサイドフォトマスクブランクス

1メガビットDRAM時代に対応したフォトマスクブランクスとして、従来のクロムコーティング品に代わるモリブデンシリサイドコーティング品のサンプル供給をHOYAが始めた。アルバック成膜に次ぐもので、両社とも三菱電機の技術供与を受けている。

■住友電工、古河電工 '86.3.13日刊工業 石英管を使わない光ファイバー母材合成

住友電気工業と古河電気工業は、石英管を使わずに気相反応のみで光ファイバー母材を合成する新VAD法の技術を確認し、年内にも量産化する計画である。この方法によると不純物や水分の混入が防げ、伝送損失などの特性が飛躍的に向上する。

■国立都城工専国府助教授 '86.3.18日刊工業 チタン酸多孔質ガラスセラミックス

国立都城工業高等専門学校工業化学科の国府俊則助教授は、約50%の酸化チタンを含有するけい酸質の多孔質ガラスセラミックス(TPGC)の開発に成功した。TPGCは溶融法で作った多成分ガラスの分相結晶化により製造し、センサーや触媒などへの応用が考えられる。

■藤倉電線 '86.3.25日刊工業 全合成光ファイバー母材合成

藤倉電線は、石英管を使わずに気相反応のみで光ファイバー母材を生産できる技術を確認した。

これで住友電工、古河電工、藤倉電線の光ファイバー大手3社が全合成技術の実用化段階を迎えた。

■旭硝子、ライオン '86.3.25日経産業 結晶化ガラス歯冠

旭硝子とライオンは、結晶化ガラス歯冠材料の臨床試験を今年夏から東京歯科大などで開始する。両者が開発した歯冠材料はリン酸カルシウムを主原料としており、天然歯に近い物性を有している。

■日本板硝子 '86.3.28日本工業 低抵抗のITO膜

日本板硝子は、スパッタリング用ターゲットを合金から酸化物に変えることによって従来の1/2から1/3の抵抗率($1 \times 10^{-4} \Omega \text{cm}$)を有するITO膜の製造に成功した。これにより液晶表示装置の大型化が可能になる。